受け継がれる まちづくり
～未来の主役たちへ～

市では、まちづくりを進める上で、さまざまな計画を策定しています。それらの計画の中で、最上位に位置づけられているのが、総合計画。昭和50年からこれまでの間、5度にわたって策定。中・長期的な展望に立ち、まちづくり全般における目標とその実現に向けた方策を定めています。今月号では、総合計画でめざしているまちの姿と将来のまちづくりを担う子どもたちを育成する事業を紹介します。

第五次総合計画

市民の思いを反映させたわがまちプラン

全ての総合計画に共通しているのは、市民の皆さんの思いを取り入れ、行政と市民が一緒にまちづくりを考えた市民参画型の計画という点です。第五次にあたる現計画は、次のような市民参画の取り組みを行いました。また市民に親しみを持ってもらいたいと「わがまちプラン」という愛称がついています。

- **小・中学生対象**
  絵画・キャッチコピーの募集
- **18歳以上1、500人対象**
  市民意識調査
- **全市民対象**
  地域ワークショップ開催、「10年後の大竹市へ」のメッセージ募集、計画案へのパブリックコメントの募集
- **市内各種団体対象**
  総合計画策定市民委員会の設置

市民が考える「よいまち」のイメージが計画の根幹

市民参画の取り組みによって多くの市民が考える「よいまち」のイメージをまとめ、「みんなでつくろう！子どもから高齢者まで夢と希望にあふれ充実してくらせるまち」というキャッチフレーズができました。この「よいまち」のイメージは、現総合計画の根幹となっています。

平成5年（策定）⇒平成12年（目標）

第三次総合計画

③【目指す都市像】活力・快適・感動都市おおたけ

【策定時の時代背景】核家族化などに伴う家族構成の変化や政治・経済活動の広域化、情報化、国際化など社会構造が変化してきました。そのような中で、本格的な高齢化社会に対応する新しい長寿社会の建設も大きな課題となっていました。また人口などの東京一極集中が進み、地方圏でも各ブロックの中枢都市や県庁所在都市への集中が進む一方で、多くの地方都市の停滞・低迷が顕著になってきていました。

昭和50年（策定）⇒昭和60年（目標）

総合計画書

①【目指す都市像】公害のない、豊かな、明るい活気に満ちた工業都市

【策定時の時代背景】昭和29年の市制施行以来、新しい都市づくりを工業都市建設に求めた結果、化学繊維、パルプ・紙、石油化学工業を中心とする大企業が相次いで進出し、広島県西部における主要な工業都市として発展、人口も38,457人というピークを迎えていました。一方で、昭和49年の第一次石油ショックに伴う景気の冷え込みや公害の発生などにより生活環境の悪化が次第に顕在化した時期でもあります。

平成12年（策定）⇒平成22年（目標）

第四次総合計画

④【目指す都市像】優しさいっぱい・多彩都市　おおたけ

【策定時の時代背景】21世紀を目前に、急速に進んだ少子・高齢化や国際化・高度情報化・グローバルスタンダード（国際基準）化など社会経済構造が大きく変化。家族構成の多様化による子育てや介護ニーズ・環境・エネルギー問題への関心が高まっていました。また、中央集権型体制から地方の自主・自立と連携による分権型社会へと社会情勢が転換していきました。

昭和57年（策定）⇒平成7年（目標）

新総合計画

②【目指す都市像】人情味あふれる住みよい工業都市

【策定時の時代背景】昭和54年の第2次石油ショックの発生に伴う資源・エネルギーの制約など、社会経済基盤の変化による景気後退時期。本市でも主要産業が構造的な不況におちいり、地域経済に深刻な影響を与えました。そのような状況の中、昭和50年当初から進められてきた弥栄ダムなどの大型プロジェクト事業が、順次具体化され、都市機能が飛躍的に強化されました。

「よいまち」実現に向けたテーマと将来像

人が、まちに暮らす基本的な要件は、生計が成り立つこと。その次に安全や安心を求め、さらには心の豊かさなどの生活の質の向上を求めるようになります。

本市では、このような各段階を充実させるまちづくりに取り組み、最終的には市外の人が「住みたい」、全ての市民が「住んでよかった」と感じるまちをめざしています。このめざす「住みたい、住んでよかったと感じるまち」が、まちづくりのテーマであり、それは市民が考える「よいまち」そのものです。そして「よいまち」となった大竹が発信するイメージを「笑顔・元気かがやく大竹」とし、まちの将来像に位置付けています。

まちづくりの主役は市民

子どもから高齢者まで、多くの方が関わり作り上げた総合計画。計画では、①大竹を愛する人づくり、②生活基盤が整ったまち、③安全なまち、④安心できるまち、⑤心にゆとりを感じるまち、⑥行政・社会の仕組みづくりの6つをまちづくり推進のための基本目標として定めています。

中でも、まちづくりに自覚と責任が持てる「大竹を愛する人づくり」は、まちづくりのエンジン、つまり推進力として重要な目標です。

総合計画を推進して「よいまち」をつくっていくのは、人の思いと実行力。「自分たちのまちは自分たちでつくる」という基本理念と責任を抱いた市民の皆さんが、まちづくりの主役なのです。

まちづくりは人づくりから未来の主役を育成

過去から現在、そして未来へ。「よいまち」を目指すまちづくりに終わりはありません。大竹を愛し地域を理解することができ、また地域のつながりを大切に思い地域住民同士が助け合うことができる。そのような「大竹を愛する人」をたくさん育てたいと思います。

市では、大竹を愛する人づくりとして、ジュニアリーダー育成事業や中学生交歓交流事業を行うなど、未来のまちづくりの主役たちの育成にも力を注いでいます。

ジュニアリーダー育成事業

未来を担う主役たち

自然の家やさか

Otake Junior Leaders　大竹を愛する人づくり

4年目を迎えたジュニアリーダー育成事業。中学生が主体となり、小学生高学年から高校生までが集団宿泊研修での生活を共にしながら、各回ごとにテーマを決めてさまざまなプログラムを協力して行います。今年度も多くの方の協力や意見をいただきながら、全7回のうち6回を終了しました。ここでは、将来の大竹市を担う青少年の育成を目的としたジュニアリーダー育成事業の概要をご紹介します。

心の体力を培い地域リーダーの育成を目指す

学校も年齢も異なる仲間との体験学習を通して、社会性や自主性、協調性を育み、コミュニケーション能力や忍耐力といった、この先社会を生き抜いていく上で必要な心の体力を培っていく。これが、この事業の目的の一つです。

広い視野を持ち、地域とのつながりを大切にする。そんな将来の大竹市の地域リーダーを担う青少年の育成を目指しています。

参加する子どもたちに大竹を好きになってほしい

この事業では、自然の家やさかを拠点に、大竹市のさまざまな場所を訪れています。

こうした中で、大竹の良いところを再発見し、大竹を好きになってもらうことがこの事業のもう一つの目的です。

研修の主体は、中学生

この研修では、中学生が主体となり、高校生のサポートを受けながら、小学生たちをまとめ、自分たちでジュニアリーダー研修を創り上げていきます。

幅広い年齢層の子どもたちが集うこの研修では、学校や家庭では学べない多くのことを学ぶことができます。

リーダーの形は一つではない

アイデアを出すのが上手い子、的確な指示を出せる子、相手の気持ちを読み取るのが上手い子、友達作りが上手い子、盛り上げ上手な子、常に冷静な判断ができる子などその子によって持ち味は異なります。その持ち味を生かせる場を見つければ、みんながリーダーとなり得ます。

さまざまなプログラムを体験しながら、自分の得意分野を活かせるポジションを見つけていくことが大事です。

継続参加でさまざまな立場を経験

小学生は中学生の指示に懸命に応え、中学生は主体となって動き、高校生は中学生にアドバイスや協力をする。

事業に継続して参加することで、小学生から中学生、高校生と成長する中で、さまざまな立場での役割を経験することができます。

当事者意識を持つ

一部の人だけが積極的に動いても、それ以外の人が他人事と捉えていればその集団はうまくいきません。

自分たちのジュニアリーダー研修であるという当事者意識を、全員が持つことが目標です。

1 出会い

１人で参加するのは不安。だけど、みんなそうなんだ。
班の旗をみんなで考えて作ったり、ゲームをしたりして、仲良くなれた。布団の上でやったトランプは楽しかったな。
毎回こうやって輪になって、やったことを振り返って話し合うみたいだ。人前でしゃべるのは苦手だな。

2 深める

国立江田島青少年交流の家

高校生リーダーによる講演の後、みんなでリーダーとは何か考えてみた。火を起こし、みんなで作ったカレーは絶品だ。
２日目。全員の呼吸が合い、カッターが進んだ時は感動したな。２回しか会ったことないけど、俺たち仲間だね。

3 交わる

市井原キャンプ場

３泊４日の「野性への挑戦」にチャレンジ。キャンプファイヤーや木工細工、川遊びや釣りなど、夏を満喫した。
ジュニアリーダーのメンバー以外の子どもたちともすぐに仲良くなれた自分がいた。

4 わかる

総合市民会館

岩国航空基地の子どもたちと一緒に茶道や大竹和紙の紙すき体験をした。紙を人の手で作るのは、こんなに大変なんだな。その後、アメリカの遊びを教えてもらった。言葉は分からなくても頑張って話せば通じるもんだね。

5 自立

三倉岳

１日目に、野外活動での危険予知・回避方法などを学んだ。第６回の三瓶でやる雪遊びプログラムをみんなで企画した後、夜遅くまで「自立」について考えた。
２日目は三倉岳登山。予想以上に険しかったけど、「自分の身は自分で守る」昨日学んだ成果を見せれたよ。

6 歩む

国立三瓶青少年交流の家

一面の銀世界を、歩くスキーで体験。かまくらを作ったり雪合戦をしたり。大竹にもこれくらい雪があったらな・・・。
企画会議では自分の意見を出せた。次回はみんなで企画したプログラム。絶対に成功させたい。

7 まとめ

3/15〜16
自然の家やさか
予定

第６回で自分たちが企画したプログラムをいよいよ実践する。
メインは２日目の「総合市民会館まつりのお手伝い」。１日目に「自然の家やさか」に泊まってしっかり準備をして、１年間学んだ成果を見せたい。

大竹を愛する子どもたちへ
活躍できる人になろう

野外活動が好きな人、みんなで泊りに行くのが好きな人、夜中まで友達と語りたい人、年下の子の面倒をみるのが好きな人、とにかくはじけたい人、リーダーといえば私でしょ！という人、などみんないろいろな目的で、この事業に参加しています。

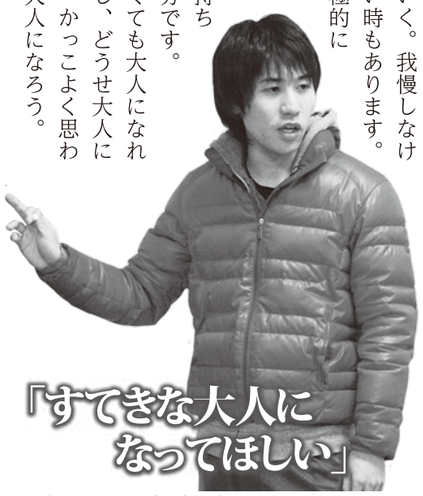
小学生から高校生までの参加者に加えて、スタッフは大学生や社会人。幅広い年齢層の人が、この事業に関わっています。

海や山や川へ行き体を動かし、時には頭を使って課題をクリアしていく。我慢しなければならない時もあります。しかし、積極的に取り組み、誰よりも楽しんでやろうという気持ちがあれば十分です。

何もしなくても大人になれます。しかし、どうせ大人になるのなら、かっこよく思われるような大人になろう。

中学生や高校生、社会人へと成長していく過程において、さまざまな集団に入っていく子どもたちに、「どこにいっても活躍できる人となってもらいたい」「すてきな大人になってほしい」私たちスタッフは、そんな思いを持って一所懸命、子どもたちの成長をサポートします。

来年度も市広報４月号で募集する予定です。一緒に活動できることを楽しみにしています。



「すてきな大人になってほしい」

ジュニアリーダー育成事業担当 生涯学習課　山沖主事

中学生交歓交流事業

広島と沖縄。つながる思いが「絆」を育み、子どもたちを成長させる。

2012　沖縄→広島
沖縄県豊見城市から11人の中学生を大竹に迎えました。
初めは照れくさそうな顔でしたが、
3泊4日を笑顔で過ごし、別れを惜しむ顔はとても悲しそうでした。
「また来年会おうね。」

2013　広島→沖縄
大竹から12人の中学生が沖縄へ行きました。
遠く離れた地で多くのことを学び、必ず再会すると約束し手を振った
団員たちの顔は、少し大人に見えました。
「これからもずっと友達だよ。」

▼ 広島の思い出

平和記念式典参列

マツダスタジアムにて野球観戦

世界遺産宮島散策

▼ 沖縄の思い出

ウージ染め体験

美ら海水族館見学

沖縄そば作り体験

海軍壕指令本部見学

平和祈念公園見学

中学生交歓交流事業では、沖縄県豊見城市と大竹市が隔年でお互いの中学生を派遣し、平和学習や体験学習を通して、広い視野と友情を深めることを目的としています。対象は中学1、2年生で、毎年4月頃に募集します。

その他の主なプログラム
- 平和記念公園見学
- 大和ミュージアム見学
- 三菱レイヨン大竹工場見学

その他の主なプログラム
- 歓迎会（三線の演奏等）
- 市長表敬訪問
- ひろしまの塔見学
- シークワーサージュースの試飲
- 海洋博記念公園で海水浴
- 平和祈念堂見学

ふるさと大竹のために

6から8ページにかけて紹介したジュニアリーダー育成事業と中学生交歓交流事業。これらの事業は4、5ページで紹介した第5次総合計画（わがまちプラン）の基本目標「大竹を愛する人づくり」の主要施策です。中学生交歓交流事業に参加した木元さんに、経験し学んだことを伺いました。また事業を実施する生涯学習課の橋村課長に、未来のまちづくりを担う子どもたちの育成にかける思いを聞きました。

平成18・19年度参加者　木元 夢菜さん

生涯学習課　橋村課長

中学生交歓交流事業は、平成4年度から始まり、22年間続いている歴史のある事業です。総勢368人の中学生が参加。交流を通して、つながりを深め参加者同士の「絆」を築いてきました。沖縄訪問を終えて報告会をするのですが、参加者の成長ぶりには、毎回、驚かされます。

参加してくれた人たちには、木元さんのように「成人のつどい」で新成人として実行委員長を務めたり、大竹市に住んでまちづくりに携わっていたり、中には市の職員になった人もいます。

「大竹を愛する人づくり」という観点からすると、この事業から生まれる「絆」をコーディネイトする必要を感じています。

社会教育という側面における青少年期の学習機会としては、「らんらんカレッジ」などの単発的な体験学習だけではなく、宿泊研修を通して深く関わりながら、系統的に進めている「ジュニアリーダー育成事業」があります。

子どもの頃からこういった事業に積極的に参加することで、自然にふるさと大竹が心のよりどころとなり、その経験が成人期の活動にうまくつながっていけば、より高い事業効果が期待できるのではないかと考えています。

参加者の皆さんが、ふるさと大竹のために、一緒にまちづくりを担っていただけたら、これほど嬉しく、幸せなことはありません。

私は、ただ沖縄に行きたいという単純な思いを持っていましたが、参加するには不安な気持ちもありました。しかし、この事業の魅力的な内容に興味を持ち、最後は「ここで行かないと後悔する」という気持ちが、私を参加へとつき動かしました。大竹と沖縄の参加者どちらとも仲良くすることができ、とても楽しく充実した時間を過ごせましたが、沖縄の参加者の子に初めとても冷たい態度をとってしまい傷つけました。そのことを後悔し、私は人の気持ちを考えて行動をするということを、身をもって学びました。また、私は今年の成人のつどいで実行委員長を務めさせていただきました。大好きな大竹の力になれるなら、そしてこの機会を逃したら絶対に後悔するとの思いから手を挙げました。どうしたら、みんなが楽しめるものにできるか、どうしたら、実行委員みんなが達成感を持ってやってもらえるかを考えながら企画しました。一から自分たちで作るのは大変なことでしたが、みんなの協力で無事終えることができました。

中学生交歓交流事業に参加し、人として成長できたことは今回の成人のつどいにも活きていると思います。

このような素晴らしい事業を開催していただいた市の方、参加させてくれた親、仲良くしてくれて今でも親友と言ってくれる人、みんなに感謝しています。ぜひ多くの人が参加し、いろいろなことを学んで欲しいです。